新連載コラム　『松之山の暮らし』（第１回）

星野夏海　　新潟県十日町市地域おこし協力隊員

「なっちゃん、どうしていっちゃうの？」

３０歳になる年の４月、私は新潟県の松之山にある三省地区の地域おこし協力隊員になった。三省地区は、水梨・小谷・大荒戸の３つの集落からなるエリアだ。１つ目は中央の道路を山で囲まれている水梨集落。２つ目は国道に面した位置にあり、かつて住民たちが通った小学校が残る小谷集落。そして２つの集落から少し離れた位置にある大荒戸集落。

多くの住民が田んぼや畑を営み、暮らしの糧にしている。行事は観桜会や盆踊り、秋祭りなどが開催され、住民たちの楽しみになっているようだ。

＊＊＊＊

５歳の時、私は栃木から群馬に引っ越した。新居には、両親と妹の他に父方の曾祖母と祖母が住むことになった。いつの頃からかヘルパーさんが家に出入りするようになり、ヘルパーさんの来ない日は母が二人のオムツを替え、食事を与える光景が日常になった。子どもながらに「誰かがこの役割をしなければいけないんだ。」と思った記憶がある。それはやがて、「私はおねーちゃんだから。私が家族の困難を引き受けなければならないのだ。」と、無理やり自分を納得させる思考に変わっていったように思う。

曾祖母と祖母が横たわる小さな部屋には、猫の糞尿と年寄りのにおいが立ち込めていた。

＊＊＊＊

私が暮らす水梨集落には現在 28 軒程の家があり、そのうちの数軒は別荘や空き家で、それらを除くと 19 戸、住民は約 38 人が暮らしている。メインの道路のそばには川が流れていて、今年の夏の夜には、街灯のない真っ暗な空間を蛍が彷徨っていた。一度は減ってしまった蛍が再び増え始めているらしい。

私が借りた家は「三田屋」という屋号で呼ばれ、かつて老夫婦が暮らしていた。近くには小さな畑があり、私は集落の方の協力を得て、いくつかの野菜を植えてみた。

畑を耕してくれたのは 90 代のタケオさん。畑を耕す時に私用で立ち会えず、出かける前に挨拶をしたら、「いいんだよオ、俺のことは気にするなイ。三田屋のかーちゃんが居たときも俺がうなってやってたんだ。」とニカッと笑った。

野菜の苗を植えるのを手伝ってくれたのは 80 代のフジオさん。とまと、なす、きゅうり、じゃがいもの苗を一緒に植えた。それぞれ５株ずつ植え、彼がお散歩をする際には畑を気にかけてくれていた。「きゅうりのツルが伸びてきたッセ。そろそろ支柱に絡ませてやらなきゃいけねロ？手伝おうか？」と声をかけてくれた。

特によく育ったのはきゅうりだった。隣の家に住む区長夫人のアツコさんは私を見かけると、「オイ、きゅうりがバカいっぱい生ってるぞ。採らないとおばけきゅうりになるスケ、栄養とられて苗が傷むぞ。」そう言って一緒に収穫してくれた。

＊＊＊＊

「なっちゃん、お山の向こうにいっちゃうの？どうして？」と母が私を抱きしめながら言った。

私は少し考えてから静かに答えた。

「うん。どうしてって、自分もヒトも大切にしてみたくなったんだよ。」

母はなぜこの問いを私に向けたんだろうか。私の返事を母はどのように受け止めたのだろうか。

ある朝、新品の軽トラに荷物を積んで、「先生」に引っ越しを手伝ってもらった。「よく生きる」ってどういうことなんだろう？　　（つづく）